

くわがたも泣いている

大野郡百枝小学校四年の学級誌に、麻生哲彦君の「くわがた」のうたがあります。くわがたみたら／まるでブラシのような　しょつかくに／たかのような　するどい足／目をみたら　泣きそうだ／おまえも　親に会いたいのか

くわがたが泣いているっ！　そう言われると、ほんとうにそうですね。「親に会いたいのか」すごい言葉。昆虫の心の中に温かく入りこんでいます。しかし、「子供」と言われる皆さんは皆その温かい心をもっています。

長崎県の端つこの海辺の田平町北小学校六年生畑原良君の文の一節―「九十一歳のおばあちゃんが独り暮らしをしています。いつも寂しい寂しいと言っています。母もすすめるのでよくたずねて行きます。とても喜んでお菓子をくれたり、若い頃の話をしてくれます。一家が愛知県に働きに行った後、孫一人預かっていたそうです。その頃が一番楽しかったのでしょう。孫の話をよくします。僕に『ひろ』と孫の名前で呼ぶことがあります。そんな時、僕は黙ってひろになりきっています…」。

畑原君も温かい。独り暮らしのおばあちゃんに明日も生きようという力がわいてきます。畑原君もまた生きることとはどういうことか、おばあちゃんによっておほろげながら教えられているのです。くわがたの目が語るように、悲しさ寂しさは生きることに本質的な意味をもっています。

俳句の最高峰の人芭蕉ばしやうに、「猿引きざるひの猿と世をよ経る秋の月」といううたがあります。猿引きは猿まわし、猿まわしが今日の仕事を終え、背負うふろしき包みの上に猿をちよこんと乗せて独り暮れなむ秋の道をたどっている。はや月も上がっている。――寂寥せきりやうたる風景です。旅芸人の一生はじつは私たちの一生。人生も同じく何かを背負うて独りゆく旅だからです。その背負うもの、その背負いぶり、ひとそれぞれに違います。しかし、それがひとそのものの違いでもあるのです。

(一九九〇年二月十七日)